慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	本佐録とマキヤヴェリズム
Sub Title	
Author	瀧本, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). (1920. 4) ,p.487(33)- 513(59)
JaLC DOI	10.14991/001.19200400-0033
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19200400-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

於て成し遂げらるべき事に比較すれば殆ど云ふに足りない。勞働組合運動は猶ほ根本的の改造を行はなければならぬ事は Cole も之れを認めてゐるのである。(Introduction to Trade Unionism p. 106)それではギルド・ソシャリズムは實際的の意義を有せぬものであらうか。私はさうは思はない。ギルド・ソシャリズムは少くも消極的の merit を有つてゐる。ギルド・ソシャリズムの實現には障碍がある。併し今日の英吉利勞働者は產業の國有丈けでは滿足しなくなつてゐると同時に彼等の大部分はサンヂカリズムの短所を知つてゐる。既にこの兩極の何れをも取らぬとすれば彼等は如何なる方向に志すであらうか。ギルド・ソシャリズムの實現は困難であつても、ギルド・ソシャリズム以外の方向は英吉利勞働者の進む事を一層喜ばぬ方向である。私がギルド・ソシャリズムの消極的 merit と云ふのは是である。（完）

本佐錄とマキヤヴェリズム

瀧本誠一

德川家康の謀臣本多佐渡守正信の著作として傳はつて居る、本佐錄と云ふ小冊子は、德川氏の創業より其の滅亡に至るまで、凡三百年間、隱に施政の方針を支配して居つた有名なる書き物である。

本佐錄とは本多佐渡守の著作であると云ふので、後人が假りに名付けたものである、元とは逸名氏の意見書であつて、其の作者に就ては世上に色々の說あり、藤原惺窩が正信の爲に記したものだと云ふ者あり、（本佐錄林大學頭の跋文を見るべし）又全く後人の僞作に係はるものだと主張する者ありて何れも多少疑問となり居ることは事實なるも、木下順庵新井白石などは種々考証して、斷然正信の著作であると鑑定し、室鳩巢は之に對し、正德年間（四年八月ならん）加州の青地齊賢に寄せた る書中に「佐州公（正信）自筆の記と申事未決に存じ候、當時學識有之人へ佐州公儒道

の有增御尋に付、其人より記し候て佐州公へ進上したるものを、重て大君（二代將軍秀忠）より治道の儀など御尋に付、差上けられたるものゝ樣に存せられ候（日本經濟叢書第二卷所載兼山祕策二九二頁）と云ひ居るも、其後十數年を經て享保十年に彼が著はしたる題「本多佐渡守正信論治道國字書」と云へる漢文には「近世贋書多出、往々有僞名賢之作、以售其說者、雖此書亦爲輿論之所疑、唯順庵木先生、白石新君美、皆以爲出於佐州君之手、無疑也（中略）於是始知此書爲佐州君之所撰、而成於當時啓沃之餘也、順庵白石之鑑定、亦可謂信而不謬者矣（此の全文は本佐錄に附刻せり）と云つて明かに順白兩先生の說に裏書して居るのである、而して此等の諸先生は何れも加州に緣故ある人々であつて、現に同藩の國老本多家（正信の子孫）に傳へたる古文書に徵し、夫れ〳〵審かに考証せられたることなるが、故に正信の著作であると云ふことは今は殆んど疑點を容るゝの餘地ないかと思はるゝのである。

そこで此の小冊子の內容はドンなものであるかと云へば、その條目は凡て七個條であつて、一、天道を知る事、二、身を端しくする事、並我身の行、國の政の惡きを前廉に知る事、三、諸侍の善惡を知る事、四、國持の心を知る事、五、家を繼べき子を選ひ、後見の人並おとな役人選ふ事、六、百姓仕置の事、七、異國と日本との事であつて、此の條目だけを一見すれば、何にも珍らしき事でもなんでもなく、その當時普通の記錄に過ぎない樣であるが、茲に第一疑問となつて居るのは、所謂天道とは何事ぞ　言葉かの問題である、一體德川時代には俗間普通に天道々々と唱へ、婦女子にもお天道樣（此の場合にはテントウと清音に唱ふ）が見てイラッシャルとか、お天道樣のばち（罰）が當るとか云ふ場合に常に用ひ來つたことなれども、此本佐錄の第一條にある天道はソウ云ふ無邪氣の言葉ではなく、コレハ全く西洋南蠻人の持ち來つた天主敎を指したものであると云ふの說である、兼山祕策に揭げたる室鳩巢の書面に依れば此の說は全く同人の師なる木下平之丞（即ち順庵先生）の物語に出でたるものゝ由にて、同書には吉利支丹の徒流、其の時分はまだ居り申候、彼が法には天主を立て候て天道を表し申し候間、佐渡守殿天主の事を天道と御直し候哉、此の儀は木下平之亟殿了簡の由にて、私は先日少公（正信の後裔安房守政昌の事か）より御よこしなされ、初めて見申候、存外なる事に御座候、是れにては東照宮を輔けられ、百年の泰平を被開佐命之臣と申す事恥かしからぬ儀と奉存候云々（經濟叢書本

兼由祕策二九二頁）と云つて居るのである、然るに本佐錄の附錄として世上に流傳せる白石の書中（無名氏に寄せたるもの）には此の事を辨解し、何にか憚る所あるが如く、往々不明瞭の言語を用ひて、鳩巢の聞き誤りか何にかの如く誤魔化し、又横道に入りて當時切支丹を信じ、呂宋へ脱走したる内藤飛彈守如安の事を記し、文中アラハに本多正信とは指さゞるも、ボンヤリ「飛州（内藤飛彈守）の事によりて西學の事にもよばれ候」と云つて、正信も亦切支丹信者の一人なりしか如き言を洩らし、續いて又「永祿中此教（切支丹）我西鄙（九州の事なり）に來りて幾もなく、其法六十州にみち行はれ」云々と如何にも當時切支丹の盛大なりしを說きて、天下の名士が多く之に歸依したる事を述べ、ソレより又「阿蘭陀の互市の事によりて申むね候事によりて彼法（切支丹）を禁遏せらるべき議定り候へども、當時にありては彼學に勝るべきの教また其餘の法なきが故に邪を以て邪を禦かれて候はゞ（上の邪は切支丹にて下の邪は佛教なるべし）尙ほ古へ夷を以て夷を攻めし策のごとくとも申すべき歟」と云ひ、又「佛氏は老莊の緒言を竊みて其論を尊くし候事の如く天學（天主教の事を云へるにて西學も同じ意なり）も亦詩書の要語をかりて其說を飾る事どもに候、若し然らば飛州の如きも吾黨の人にも候ひしを、時人さして天學の徒とも名づけ候にや、今はた其事を詳にすべからず、況や當代によりて論じ候はんに、其西に黨せし罪候はず、般の義士、周の頑民など申す事も候へば、只た何れにも最も惜しむべき人に候とは存じ候」（叢書卷一の三七頁）と間接に如安の事を述べて正信も亦同じ流派の人なりし事を匂はし居るを見れば、白石も亦本佐錄の天道が天主教の天主である と云ふことには、反對の意見があつたでも何でもなく、實は鳩巢の如く、其師順庵先生が公然斯くの如きことを明言したと云つては、聊か憚る所あるが故に、ソウは云はないが、如上の文を熟讀すれば白石も内々同じ意見ではなかつたかと推測せらるゝのである、余は未た此の點に付特に研究するの暇なきを以て確かに斯くと斷言するの勇氣なきも、本佐錄に論じたる治道の主義が西洋南蠻人より傳來の說であると云ふことは、全く影も形もなき虛搆のことにはあらざるが如し。

本佐錄全篇の主意は、專ら君道を論じたるもので、一國に君臨するものゝ心得方を痛切に說いたものである、君主たるものは其の身を正ふし、奢侈を戒め、人民を撫

育して、仁政を施すべしと云ふのであるが、ソレは表面上の事であつて、實は君主の祕訣は巧みに人心を收攬して、我れに歸服せしむる樣の手段を運らし、智仁勇の三つのものを兼て、油斷なく天下を治めよと云ふのである、殊に智慧と云ふことに非常の重きを置き、天理と權道とを併せ説きて、仁義ばかりでは天下を治むること能はざるを述べたものである、故に儒道も排擊すれば佛敎も盛に攻擊すれども、坊主が事實ありもせぬ地獄極樂を説いて愚民を瞞着するは、國を治る理に叶つて居つて、是か所謂權道であるとして、頻りに權謀術數の必要を説いて居るのである、儒者の敎は多く皆心を正くし德を行へ、誠心誠意なれと云つて、その事のみが眼目なれども、正信は同じ樣に德行を口にするも、道學者めきた迂遠迂濶の事は云はず、唯た主もに智慧々々と云つて、人を使ふにも民に接するにも、皆智慧を專一とする樣な事を説いて居るのが、彼の特色とする所である、故に德行一點張りの儒者などは、此の本佐錄を評して、權謀術數の書とし、甚たしきは詐僞欺瞞を敎ふる邪惡の説として、痛く排斥して居る者もある、近年安部正人と云ふ方が著はされた「德川政道」と云ふ書物を見ると、高橋泥舟翁は正信を批評して「詐僞權變の持て餘し者である、併し

彼は私利を目的とせず、其の主を念ふの一念に出でたるものである」と云はれたことが書いてあるが、此の評は當らずと雖も、遠からずであらう。

余の見たる所では本佐錄は宛もマキヤヴェリのプリンス(君論)に酷似して居ると思ふのである、本多正信と云ふ人も亦マキヤヴェリに能く似寄つた性格の人らしく想像せらるゝのである、マキヤヴェリと云ふと君主の無上權を極端に主張した古今無双の專制家であつて、權謀術數の權化であると思はれて居る人で、今日人民方に同情を有する人々は、其の名を聞いてすら震へ上る事であらう、歐米の政論界では Machiavelism と云ふことは惡德とか兇暴とか云ふことゝ同じ意味に使用せられ、何人も自ら公然と余は「マキヤヴェリ主義」を執る者なりと宣言する勇氣はあるまいと云はるゝ程、恐ろしい言葉となつて居るのである、然れともマキアヴェリは今世の人が誤解して居るが如く悖逆狂暴の人でもなく、野卑陋劣の者でもなく、其の實立派な性格の人物であつて、アラユル惡事惡行は斷じて之を排斥し、現に政治に於てこそ強大なる統一國家の必要を感じ、君主の權力の絶對無上ならざる可らざることを説きて、宗敎でも倫理でも、皆其の無上權の下に立たざるを得ざるこ

とを主張したるも、歴史家としてのマキアヴェリは曾て少しもソンナ痕跡を有せざるのみならず、彼は却て熱心に德行を賛稱して惡事を嫌惡するに於て敢て人後に落ちざりしことはディヴィット、ヒュウムの証言する所である（グリーン、グローネ出板ヒュウム哲學全集第四卷三九一頁）故に泥舟翁が本多正信に就て私利を目的せず云々と云はれし評語はマキアヴェリに就いても同じ樣に當嵌ることなるべし。

然らばマキヤヴェリの政治學說は取るに足らざる暴論であるかと云ふに、ソレは必ずしもソウでなく、現にポロックの如きは其の「政治學史」に於て近世の政治學研究はマキアヴェリに權輿すると云つて、彼が純乎たる學者の態度を以てアリストウトル以來長く世上に閑却せられたる倫理學と政治學との區別を明にしたる功績を叙し、當時伊太利は外敵四境に迫り、佛蘭西人獨逸人若くは西班牙人等交も侵入して奪略を肆にしたるよりマキアヴェリは此等の外敵に對して伊國の統一を計り、其の隆興を期圖するには、人生のアラユル事を犧牲にして、國權の伸張、國力の充實に努力せざる可らざるの必要を認め、此目的を達するには英明果斷にして伊國の運命を双肩に擔つて起つの大君主なかるべからざることを確信して居うた事を縷述して、結局ポロックは「文明の程度は違ひ、又國俗の差異はあるも、近年獨逸の統一が昔時マキヤヴェリが伊國の爲めに考へた遣り方と殆んど全く同樣の方法で成功したる歴史を目擊して居る我々にはマキヤヴェリの思想が實行不可能の空想であるとは何うあつても思はれないのである」と云つて（政治史第四章參照）マキヤヴェリの當時伊國の狀態が彼が如き政策の必要を如何に痛切に感して居つたかを論じて、彼が爲め一片の同情を表して居るのである、然れども此の時代の學者はマキヤヴェリに限らず、何れの人も國家の統一、權力の集中と云ふことには非常の重きを置き、一般に學說としては國家主義と云はんよりは寧ろ個人主義を執つた人々ですら、政治の權力の集中を是認し、鞏固なる政府の必要を主張したものである、例へばマキヤヴェリの後に政治哲學者として現はれたる人々は概ね皆治者の專制權を唱道した人々であつてホッブスの如く極端なる王權論者は暫らく論外とし、ボーダン、ミルトン、バーリントン、スピノザ等の諸學者は、概ね皆個人主義の自由論者として有名なる人々であつたに拘はらず、政權の鞏固を主張する點に於ては、何れもマキヤヴェリの亞流にして、殊に Oceana の著作で其の名を知ら

れ、チャーレス二世の復辟當時共和主義を皷吹する危險思想の宣傳者として、朝憲紊亂の刑に問はれたるハーリントンがマキヤヴェリ及アリストウトルの崇拜者であつて、前者を「近世唯一の政治學者」として特に非常に稱贊し居たることは蔽ふ可らざる事實である（ダニング政治學史第二册二四八頁を見るべし）又有らん限りの苦心を竭くして個人的自由の領域を確保せんことを求め、自由を以て國家無上の目的とすべしと唱へたるスピノザも亦頻りにマキヤヴェリを矜式し、常に最上の讃辭を以て彼を稱揚し居たる事（同上三一七頁下注を見るべし）などを回想すれば歷史的に觀察したる Machiavelisms は少なくとも半面の眞理あることは確であつて、本多正信の本佐錄に含まれたる主張即ち Masanobisms と共に今日の政治學者が大に研究すべき價値を有するものである。

本佐錄の冒頭に天道の說明を爲し「天道とは神にもあらず佛にもあらず、天地の間の主（あるじ）にて然も體なし、天心は萬物に充滿して至らざる所なし」と云つて居るのは、如何にも基督敎の說敎めきたる口調であるが、又其の先きに至れば「唐人に傳てこの天道の理を得たり、私の工夫を以て申すにあらず、然ども口傳にあらざれば眞の妙所には至りかたし……大方は書付侍れども言語に逃られぬ一段あり、但天也理也又權道と云ふ事あり」と記るしあるより、天道を天主敎とする說に與みする者は、此に「唐人」と云ふは前文に「四百餘州を治め」て云々などの事あれば支那人を指したものゝ樣に聞ゆるも、其の實は南蠻人を云つたので「ゼシュウィット派」の敎師にてもありつらんと想像するに至つたのである、一體此の章は言葉が足りなくて何となく奧齒に物の挾まりたる樣の感じあるが、それは兎も角、此の章の終に「但天也理也又權道といふ事あり」を述べて、特に玆に權道の語を突然と云ひ出したるは、本佐錄の他の各條目がマキヤヴェリの「プリンス」に酷似して居ることに想到して何となく意味ありげに覺ゆるは必ずしも余の色眼鏡に映したる幻象にあらざるべしと思はる、余は今玆に本佐錄と「プリンス」とを對照比較して、一々その異同を辨するの暇なしと雖も、人君は私欲に耽り身の榮花を極めて天道に反するときは忽ち人民の恨を招きて天下を亡ふべきを戒め、臣下を使ふには一心に忠節を爲すように情けを以て使ひ、兵書にある主將の心得は務めて英雄の心を取るにありと云ふことに注目し、自分には廣大なる智慧ありても、智慧を智慧とせず、廣く人言を容れ

て衆人の智慧を我か智慧として用ふべしと云ひ、仁義のみを正直に株守して居つては國家は治らず、時としては斷然威力を以て人民に臨まざる可らずと述べ、殊に謀叛の萠あるときは大事に及ばぬ先きに斷然たる處置に及んで後患を貽すべからずと極言し、自分の歸依する宗教は假令其の心に於て虛誕であると思つても、表面には大に之を信仰する樣に見せ掛けるのが法であつて、例へば佛敎は、取るにあらざるも、其の地獄極樂を說いて愚民の心を收攬するは頗る治道に叶へりなど云へる本佐錄の論旨は殆んど皆プリンスの中に明かに同じ樣な言葉遣に依つて述へられてあるので、此の二書を全篇通して對讀すれば全く同じ作者の手に成れるかと思はるゝ程似寄りの點が多いのである、殊に「プリンス」中には往々マキヤヴエリには不似合なる民主々義めきたることを云ひ「人民に依賴するものは猶ほ沙漠の上に家を築くが如し」と云へる古諺を引きて痛く之を排擊し、君主たるものは人民に信賴し、其の忠義心を以て國を治め身を安するの根本と爲さゞる可らざることを論じて居るが、正信も亦之と同じく人民には食ふたけのものを殘して、跡は皆租稅に取り上くすべしなどゝ云ひつゝ「百姓は天下の根本なり、不レ飢不レ寒、困窮せぬごとく養ふべし」と云つて甚た社會主義めきたことを記るし「聖人の語に君子周レ急不レ繼レ富とあり、此の心は萬民困窮せぬよふに養て自然に聚る財寶は蓄へ置て鰥寡孤獨、貧窮の者に與ふべし……聖人天下を治め玉ふ第一の政は鰥寡孤獨の四者に慈悲を加へ給ふ」云々と述へて、頻りに仁政を說きたるは宛もマキヤヴエリか Anti-Machiavelism を說き、正信が Anti-Masanobism を說いたようなものであつて此等例外の點まで彼此相似たるは亦甚た奇なるにあらずや。

然れども茲に一歩を進めて之を看察すればマキヤヴエリ當時に於ける伊太利の國狀は前に述へたる如く非常の大困難に陷り、士氣腐敗し民風墮落し、內は小侯國小黨派、互に相排擠して私利私欲に汲々とし、外は各國競つて其の野心を逞ふし、隱謀詭計是れ事として朝の親友は夕の仇敵となり、今日我々の世の中に於て最大の惡德とせらるゝ不義背信の行の如きも、其の時代に於ては殆んと普通の常事と見做され、之を犯すものありても、左程一般士人の感情を刺激することなかつたのである、而して我か德川氏の初代即ち正信當時の狀態はドウであつたかと云ふと、固より伊太利のソレの如く敵國の壓迫を蒙るなどの事は之れなかりしと雖、天下

尙ほ創拗にして戰國の氣風を脫することゝ能はず、四方に割據したる大名等動もすれば爭亂を思ふの際なりしかば、內政の不整頓なりしこと並に民心の落付かざりしことは千五百年代の伊太利と甚たしき差異はなく、其に强大なる統一政治の必要を感したるや明かならん、我國關ヶ原戰役の前後に於ける一般士人の氣風は、或る人々の想像するが如く、武士道の精華を發揮して、信義廉耻の心に富んで居たるや否は疑問なれども、伊太利の如き腐敗墮落の極に至らざりしことは、略々推測せらるゝのである、故に「プリンス」と本佐錄とを對照すれば、此の點に於て多少の差異を反映し、「プリンス」は本佐錄に比し、其言語字句の用法大に露骨なれども、本佐錄は立派な王道を說きたる如く見へ、前者は野蠻極る妄言を吐露したる樣なれとも、後者はイヤに親切めきて何となく氣味惡く感せらるゝのである。是れ一ッには東洋人と西洋人との氣質の相違にも歸因することなるべきも、要する所主として彼我社會の狀況の同じからざりしに依るものであらう、例へは「プリンス」に於ては君主たるものは時として獸性を帶はざる可らざることを說き、公然憚る所なく猛獅と妖狐の例を示して、或は猛獅となつて暴力を振ひ、或は妖狐となつて詐術を弄するの必要を論じて居るも、本佐錄には「君たる人、驕を極めて仁義の道を知らず……面には君に隨ひ內には虎狼野狐の心ざしを含む、如此惡世の時分に天下を治るには文武の二を兼ずんば治る事なりがたし」と說けるが如く、其の白調紳士的にして上品なるも、其の實マキヤヴェリの人格が野卑であつて、正信が高尙であつた次第にあらず少し穿ち過ぎて居るかは知らざるも、正信の文武はマキヤヴェリの猛獅妖狐であつて文は妖狐を意味し武は猛獅を意味するのである、兩者の言辭に斯くの如き文野の差異あるは全く周圍の環境が然らしめたに過ぎないのである、譬へば裸體畫は西洋に於ては別に惡感情を惹き起さゞるも日本などに於ては今日まだ何となく忌やらしき感をなさしむるの類であつて、マキヤヴェリ時代の伊太利では正信の如き紳士的の言葉を遣つたのでは、宛も戰國の暗黑時代に孟子が仁義王道を說いて其の迂遠を笑はれたるが如く婉曲なる禮儀作法の好文字は、却つて何等の効用を爲さゞりしならん、是れ「プリンス」が本佐錄よりは露骨にして野卑なるが如く思はるゝ所以であらう、マキヤヴェリが平生得意の思想は「人間が成功するには徹底的の善人であるか若くは徹底的の惡人であらねばならぬ」と云ふこと

であつたそうである、正信の本佐錄にはソウ明言しては居らないが、「道に背く惡人あらば智慧と威光と武勇とを以てドシ〳〵亡ぼすべし、善人あらば大に尊ふべし」と云へるが如き、又「大名が城の要害を固め、公儀を輕んずるが如きは道を知らざるのである、道を知らぬ者は必ず謀叛すると心得べし、右の行あらば直に難題を云懸けて、急に取りひしぐべし、實子兄弟親類たりとも忽せにすべからず」など云へるの言は是れ取も直さず、場合に依つては「徹底した惡人となれ」と云ふことを暗示した、ものである、蓋し此の兩人が東西兩大洋數千里を隔てゝ肝膽相照らすこと斯くの如くなりしは豈に其の間に何等か奇緣の存するなしとせんや。

マキヤヴェリは「プリンス」の末章に於て、自分が本書を著はしたる動機を記るし、頗ふる悲壯の言を以て「イスレールの民、埃及の奴隷となりて而して後、モーセの功德世に顯はれ、波斯人、メディヤ國の爲めに虐せられて而して後、シラス、膽勇寬厚の名を顯はし、雅典民族崩壞離散して而して後、セシウスの偉材著はる、若し天此の三子を啓發せんが爲めに、其人民をして豫め塗炭に苦しむとせば、我が伊太利の如き亦必ず今日の慘毒を極め、綱紀地に墜ちて君主なく、外國交も來て奪略殺戮を肆まゝにして、其の人民を奴使し荼毒すること、遠くイスレール、波斯、雅典の上に過ぎて而して後に、英雄の憤起を待つならん」と（井上毅氏校永井修氏譯の「君論」一八一頁より引用す「プリンス」は外に經國策として杉本清胤氏の譯本あり）述べ、且つ「今殿下（羅馬法王レオ十世の甥ローレンツォ・ド・メヂシを云ふ）明かに上天並に法敎の寵命を受け、且つ法敎を維持するの任を以て之を殿下に屬せらる、加ふるに殿下は賢哲にして、其力、能く大業を成すに足れり、伊國の民殿下を外にして其れ孰れをか望まん。想ふに殿下能く余が前に援引する古英雄の爲す所に則とらば此事決して成し難からざるなり、蓋し所謂る古英雄なる者は其功績甚た偉なりと雖も、亦皆人なり、其材略衆に異なるより起て君主となると雖も、未た殿下が今日に於けるが如き地歩に立たず、其名正くして義の順なる亦殿下に若かず、上帝必す殊に福を殿下に降すべし、夫れ已むを得ずして戰ふものは義なり、他に民を救ふの法なくして干戈を勵すものは仁なり、殿下何ぞ疑はん」と（同上君論一八二―三頁）云つて、當時フロレンスの都督たりしメヂシ公に「プリンス」中のプリンスたらんことを勸めたのであるが、其の言宛も周公が武王にでも献策したるの趣なきにあらざれば、漢儒をして

之を讀ましめたらんには、天晴れ王佐の才として大に之を謳歌したるならん、然れども「プリンス」は專門學者をして近世政治學の權輿であると評さしめたるが如く、殆ど研究的に徹底して、作者の胸臆を赤裸々に露出し、隨て後來俗間に物議の種を造りたるも、本佐錄は「口傳にあらざれば眞の妙所には至り難し」などゝ云つて、表は に極言せざる所が猛獅妖狐を巧みに文武の二字に依つて云ひ顯はしたる筆法であつて、此の點より之を見れば正信の方がマキヤヴェリより一頭地を拔いて卓越したる智略家であつたかも知れないのである、柴野栗山本佐錄に序して「我佐渡本多侯之於二東照公一、其所二以馮二翼謀謨一者、皆目語頷頷而成、豈密機秘策、外人不レ可二得而知一乎」と云ひ、又「抑亦道同氣合、相投之機、冥會默契者乃爾也」と云ふが如きは兩なから事實であつて、正信はマキヤヴェリの如く不遇逆境に遭逢せずして、眞に佐命の地位にあつて、常に將軍の帷幄に參したるが故に責任上殊更らに危激の言を吐かざりしのみならず事實之を口外するの必要もなかつたのである、是れ後儒が本佐錄を評して「王道之最中」など云へる所以なるべきも、世上の傳說に依れば、家康が前田利家の己れに背いて事を謀らんとしたるを其の姻戚細川忠興に賄賂して、思ひ止らしめたるは全く正信の祕策であると云ひ、（藩翰譜には此時の事實を體よく記してある）又大坂方の存在を以て國家統一の一大障害となし、陰に彼等を煽動して、豐臣氏剿滅の機會を造りたるは矢張正信の密計に基つきたるものなりと云ひ、其他德川初代の祕密政策は多く正信を中心とせる陰謀團の方寸に出でしものなることは蔽ふべからざる事實である、果して然りとすれば學者としては兎も角も少なくとも實行家としてのマキヤヴェリは確かに正信に一籌を輸せざるを得ず。

マキヤヴェリの理想の君主は「プリンス」中に屢々引証して、其才略を稱賛しつゝあるボルジヤである、ボルジヤは法王歷山第六世の子にして、性頗ふる黠慧にして權謀に富み、常に大志を抱きて、伊國及其の隣邦を併せて統一覇業を樹てんと欲し、其の功業未た成らず、不幸其の父を失ふたると自己の重疾とに依つて目的を達すること能はざりしが、マキヤヴェリは此人を以て當時君主たるべきものゝ模範とすべしと讃美して、メヂシ公に彼を學はんことを進言して居るが、今彼か「プリンス」に記する所に依つてボルジヤの擧止行動を見れば、宛然人をして家康の小傳を讀むの感を爲さしむるは又甚た奇怪の至である（君論四六頁―五八頁、經國策三八頁

―四八頁を見るべし）マキヤヴェリは、ボルジャの人となりを評し、「毎事幾を見て預め之に備ふるの策を講じ、遠謀至らざるなし、其爲す所、凡そ僥倖若くは外國の兵を假りて邦土を得る者の良範となすに足れり、ボルジャ既に材略あつて、且つ大志を抱く、當日の勢を推して之を言へば、固より此の如くせざる可らず、然るに其の終に失敗を取りしは全く父皇の早世と同時自ら篤疾に罹るとに依るものにして、謀の善からざるにあらざるなり、故に何人を論せず、敵徒の謀計を破つて、新たに邦土を得る者は多く黨援を樹て、詭計若くは兵力を以て國政の障害を除き、國民及び軍人の畏敬を致し、敵黨を剪滅し、新法を布き、寛嚴威惠を兼ね施し、恃むべからざる軍兵を散して更らに新軍を編制し、隣國の王侯と好を厚ふし、之をして常に我を助くる所あらんことを思ひ、我が怒を致さんことを恐れしめんと欲せば、必ず、ボルジャを以て龜鑑となすべし」と（君論五九頁）云へるの一言を以てしてもマキヤヴェリの理想君主たるボルジャが如何に正信の理想君主たる家康に酷似して居るかは自ら瞭然たらん。

サテ家康とボルジャと其の性格の相類似すること斯くの如くなりしは固より偶然なるも、茲に余が此の論題の本に返つて一ッの疑點とする所は本佐錄と「プリンス」と「マサノピズム」と「マキヤヴェリズム」との間には果て何等因果關係は無つたか否やの一事である、マキヤヴェリが伊國フロレンスに生れたるは一四六九年（文明元年）にして其の死したるは一五二七年（大永七年）である、彼が著「プリンス」は其の死後五年即ち一五三二年（天文元年）に至り羅馬に於て出板せられたのであつて、ソレは本多正信の生るゝ（天文九年）八年前の事である、葡萄牙人が始めて我が豐後に來りしは正信の生れた翌年即ち天文十年（一五四一年）であつて、それより同國人續々渡來し、未だ十年ならずして天主教九州に蔓延するに至つたのである、白石の書に「此教（切支丹）我西鄙に來りて幾もなく其法六十州にみち行はれ」と云へるは、此の時分よりの事であつて、當時我國上流の士人は織田信長を始めとし、九州及其他の大名中にも之を信仰する者多くして、中々盛大に行はれ、其の後德川家康の勢力次第に增長し、豐臣氏と拮抗するに至りて、家康も亦隱に外人を利用する事を考へ、西班牙人と交渉を開いてメキシコ（當時濃毘斯般と云ふ、新西班牙の謂なり）との通商貿易を計畫し、又慶長十八年に至り伊達政宗が其臣支倉常長を羅馬に遣はし、法王ポ

ール五世に謁見せしめたるが如きは、皆史上に隱れなき事實であるが、其の時分に我國に渡來したるは重もに例の「ジェシウィット」教派の人々であつて、此の派の教義は法王の絶對無上權を主張し、頗ふる極端なる專制主義を執るものなれば、固より多くの點に於て「マキヤベリズム」と共鳴することあつたのは勿論であつて其の「プリンス」の出板流布せらるゝや、保守主義の國々、殊に羅馬加特立克教の勢力强大なる國々に於ては何れも竊かに之を尊重して、政治家座右の祕書としたるは是れ又疑なき事實である、マコーレー卿が曾て其の著「マキアヴェリ論」に批評したる所は人をしてマキヤヴェリを誤解せしむるの點なきにあらざるも（Adams. Historical Literature 二六二頁參照）兎に角「プリンス」が南東歐洲の諸王國間（東は土留格帝國に及ぶ）に如何に珍重せられたるかは卿の論文に見ても明かである、然らば此の時代に我國に渡來し居たる、西班牙若くは葡萄牙の宣教師等が、我內地の士人より政治上の事など尋ねられたる場合には其頃自國に持て囃されたる「マキヤベリズム」を說き聞かして、正信の如き智略家の好奇心を滿足せしめたることなしとも斷言すべからざるのである、當時彼我の事情を回顧すればソンナ事もありつらんと推測する方が、寧ろ當然であらうかと思はるゝのである。

然しなから以上は是れ只た賴りなき事實に基きたる推測であつて、本佐錄と「プリンス」との因果關係を斷定的に決定するには足らないのであるが、茲に推測として之を看察すれは正信の本佐錄は或は直接に「プリンス」に淵源するにあらず、同じ流儀を汲めるヂャン、ド、マリアナ Juan de Mariana などの說を傳聞して、その會心の所を採り、之に白石の云へる如く「詩書の要語をかりて飾りたる」のがその眞相にはあらさるかとも考へられざるにあらず、マリアナは一五三七年（天文六年）西班牙に生れ、一六二四年（寬永元年）に死したる人にて、正信より三年先きに生れて八年後に死したる人である、此の人は此の時代、日本に最も緣故の深かつたジェウィシット宗の大學者にして、本來は歷史が專門であつて、其の著「西班牙史」（原文は拉丁語なれとも英譯あり、一六九九年倫頓にて出板す）は近世チックノア氏が其の「西班牙文學史」に於て非常に稱贊したるが如く「エポック、メーキング」の大作なるが、此の人の著作に De Rege et Regis institutione 即ち「君道及君主の教育」とでも譯すべきものがあつて、ソレハ一五九九年（慶長四年にて關ケ原戰爭の前年）に出板し、西班牙王フィリッピ三世

に奉りたる有名の書物である、然るに其書中の論旨頗ふる危激にして一切總ての國民は羅馬教を奉せざる君主を殺戮するの權利あることを主張するが爲め、遂に巴里に於ては議會の命令に依り、燬棄せられたる程の書物であつて、其の內容は「プリーンス」と殆んと同樣のものらしく思はる、余は道慨ながら其の本書を通讀すること能はざるのみならず、何處に斯る原書の存在するやも知らざれども、近年ダニング氏が其の著「政治學史」に引証する所を見ればマリヤナが De Rege（君道論）は或はマキヤヴェリの「プリンス」よりも一層本佐錄に似通つて居るものでないかと察せらるゝのである、例へば先つ第一に Tyrannicide（孟子の是認する湯武放代主義）の權を主張し、國家を滅亡の域に陷るゝ君主は人民之を廢放するの正理なることは唱ふるは、正信が私欲に耽り身の榮花を極め、萬人恨を含まば、天道に天下を取り返へされ、子孫長く亡ふべしと云ふの言に一致し、マリヤナが國王の政策として宗教上の事に最上の注意を置かざる可らざる事を述ふるは、正信が「國を治る手たてに極樂地獄と云ふ事を假りに立てゝ」教ふるの妙用を說き「佛の心は殊勝なり國を治むるの理に叶ひたり」と云へるに同じ、マリヤナが君主の智慧に多大の重きを置き、君道の要は臣民の歡心を得るにあることを論じたるは、正信が三略（兵書なり）にある主將の法は務めて英雄の心を取ると云ふことを引証しは、民心を收むるの必要を說きたるに異ならず、マリヤナが人民に謀叛の萌しあらば最も嚴酷なる役人を遣はして用捨なくピシ〳〵之を鎭壓せしめ、而して後に其嚴酷なる役人には少しの欠點を申立てゝ之を嚴罰に處すべしと云へる奸策は、正信が橫目を使用し、謀叛の有無を察して、聊かにても斯る嫌疑ある者あらは何かと難題を言ひ掛けてピシピシ之を取ひしぐべし云々と云ふの主意と少しも異なる所ないのである、凡て此等の點はホンの一端を擧けて示したものに過きざるが、ダニング氏が斷片的に紹介したるマリヤナの意見を綜合して、正信が本佐錄に記述する所に對照すれば De Rege と本佐錄とは何となくその所論の淵源を一にするものゝ如く想像せらるるのである、故に此の點より之を批判すれば本佐錄の根本思想は「マキヤヴェリズム」の本流にあらずして「マリアニズム」の枝流より分流し來りたるものならんかとも、推測せられざるにあらず、正信が白石の書中に暗示するが如く果して「ジェシュウィット宗の信者なりしや否は暫らく別問題とし、又此の宗旨を熱心に信仰して呂宗へ通

れたる內藤如安と正信とは平素親交ありしや否も亦之を別問題として玆には之を論せざるも、當時正信の知人にして、彼の宗旨に歸依し居たる者必す多かりしなるべきは勿論の事なれば、ジェシュウィット派の緣故に依り同派の碩學として著名なりしマリヤナの學說の勢力が、遠く我國に及ひたりと見るは是れ又推測なから全く妄誕にもあらざるが如し。

然れども余は平素學說のパラレリズム Parallelism を信するものである、社會の同じ狀態の下に同じ樣なる學說の生れ出つるは寧ろ當然の事であつて、例へは甲の說が乙の說に似寄り居るか若くは又全然同一であつても、的確の證據なき以上は甲の說が乙に基因するとか、乙の說は甲に淵源するとか、必すしも彼此二者の間に因果關係の存するものとは認めないのである、文明の略々同一程度にある國々に於ては、世界何れの方面に於ても甲乙の間何等の交涉關係もなくして、各々獨立に同樣似寄りの現象を顯はしつゝあることは歷史上珍らしからぬ事實にして、學說も亦ソレと同じく東西洋全く獨立に同じ學說を發達すること往々にして之れなきにあらず「マーカンティリズム」及「ソーシャリズム」などに關する思想の起因を見れば、著しく此の「パラレリズム」の行はるゝことを認め得るのである、故に余は今此の論題の場合に於ても、固より本佐錄と「プリンス」若くは De Rege との間に源流の關係あつて、正信の意見は確かに南歐の傳來であると信する者にあらず、單に本佐錄を讀過すれば却つて寧ろ支那の學者陽明あたりの說に淵源するにあらざるかと疑ふの廉なきにあらざるも、現に享保の大儒間に南蠻傳來の說あり、後儒亦多少の疑を存し、今に至つて考証家皆之を不問に付するの憾なきにあらざれば、余は唯た好奇心に依つて此の比較論を試みたるに過きざるも、德川氏三百年間に於ける施政の方針を支配して居つた正信主義が、果して西洋傳來の學說に淵源するや否は、勿論云ふ迄もなく、學說史上の大問題である、今後斯學に志ある者は早晚必す此の大問題を研究解決する必要あらん。